「第４回　サンルダムモニタリング部会意見概要」

モニタリング調査結果
・造成池に人が簡単に入れるようになると、外来種などが放流される恐れがあるので、留意したほうがよい。 ・貯水池底層の水温が下がらないのが不思議である。今後も注視すること。 ・貯水池底層の嫌気化や滞留の状況は、昨年度より少しではあるが改善されているが、引き続き底層嫌気化に注視する必要がある。現状が続くようであれば、必要に応じて対策を実施すること。 ・魚道での減耗要因として、鳥類による食害も考えられる。水鳥が頭をつっこんで捕食しているのも確認されている。貯水池内にも魚類（鳥類の餌）が多ければ、魚道での食害も分散され、大きな問題とはならないと思われる。そのような視点で来年度の調査も検討していただきたい。 ・ヤチウグイが多く確認されるようになった（特に造成池）。当該地域やダム湖周辺ではあまり確認されない種であることから、来年度調査では留意していただきたい。 ・カワウやアオサギによる魚道の食害も気になる。魚道を餌場にするようになるとダム湖周辺にコロニーが形成され、さらに食害が拡大する可能性もあるので留意した方が良い。場合によっては、魚道を覆う（網や枯れ木などで）ことも検討されてみてはどうか。 ・近年確認されていないチャマダラセセリについては、過去にどの程度確認されていたかを確認しておくこと。 ・植樹箇所の食害については、通常はユキウサギは雪の無い時期には草本を食べるはずなので、植樹した芽を食べているのは不思議である。防鹿柵の管理においては積雪時の注意が重要であり、同様のことを実施している他事例もいくつかあるので参考にしていただきたい。 ・外来種対策として抜き取りを行っているが、１年やっただけではあまり効果は期待できない。継続して実施することが重要である。 ・ダム下流河川の物理環境は長期的な視点での確認が必要である。大規模出水で土砂堆積や州の消長が起こった後、環境が変化する可能性があるので注視すること。
今後の調査計画（案）
・令和２年度調査は原則として、平成２９年度調査と同様（地点・手法・時期）の調査内容とすること。
その他の意見
・以前、道路沿いに高山性のツツジが確認されたことがあった。そのとき、風穴のような環境であったと説明された気がするが、実際に道路沿いにそのような環境があるのか確認していただきたい。 ・文献調査での確認種については、文献の対象範囲が広域かつ曖昧なことも多いので、事業による影響を評価検討する際には注意すること。